現代美術家・美術ジャーナリスト / 村田真インタビュー

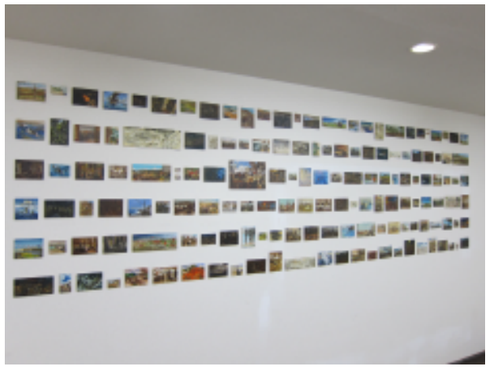
2018 年 1 月 17 日録音日

インタビュイー / 村田 真　Makoto Murata

Profile

1954 年生まれ。『ぴあ』編集部を経て、美術ジャーナリスト／ BankART スクール校長／画家。著書＝『美術家になるには』『アートのみかた artscape1999-2009』ほか。共編著＝『社会とアートのえんむすび 1996-2000 つなぎ手たちの実践』『いかに戦争は描かれたか』ほか。

Art Works



≪プチ戦争画≫　板に油彩　2015

≪画歴 2 ≫　カンヴァスに油彩　2012

Interview

初めての記憶

――本日は宜しくお願い致します。まず最初に、小さいころ、何と呼ばれていらしたのですか。

村田　まこちゃん。まことかまこちゃんとか。

――そうでしたか！まこちゃん、可愛いお子さんだったのでしょうね。今回は、美術家の幼年時代をテーマにインタビューしているシリーズの一環として村田先生のお話を伺いたいとリクエストさせていただきました。幼いころのことを中心に、美術のプロとして生きていこうと決意するあたりまでのお話を中心に伺いたいと思います。早速ですが、村田先生、まこちゃん、の一番初めのご自身の記憶、たしかに自分自身で記憶していることやシーンは何歳くらいのどのようなことでしょうか？

村田　そういう質問が出るというんで思い出してたんだけど、二、三歳ころの布団ですね。布団の図柄。赤と黒の布団の図柄を覚えていて。あと、室内の情景ですね。

――それは一人で見ていらしたのではなくて、ご家族で？

村田　家族ですね。それで大学のころに兄貴に、昔こんな布団使ってたのかなって聞いたら、使ってた、使ってた、それは昔のやつだと。だから、たしか二、三歳のころ。
　それから産湯につかってるような記憶もあるんだけど、それは多分、後の話だと思う。

――産湯？ですか？

村田　たらいの中でお湯につかってる記憶があって。でも、後々考えてみたら僕は産院、病院で生まれたので、たらいを使うことはないんじゃないかと。まあ、三歳ぐらいのときまで、たらいを使ってたんですよ。たらいのお湯に入ってたりしたことがあったので、それを産湯と思い込んでいたみたい。
　僕は小さいころ引っ越しを何度かしてるので、
年齢的に幾つぐらいだってわかるんですけど、
杉並区の久我山というところに三〜四歳ぐらいまで住んでいて、そのころの記憶が最初ですね。二軒長屋みたいな家で隣も親父の同僚の家族が住んでいて、そこにも僕と同じぐらいの年齢の子がいて遊んだのはよく覚えてる。そのころ、お尻から回虫が出てきたのも覚えてる（笑）。

――回虫？そんなこと！そういう時代だったんですね。それをご自身の体験として覚えてらっしゃる？

村田　すごい衝撃だったからね。お尻がむずかゆいような気がしてたら、何かミミズが出てきたの。びっくりして泣きわめいて。そしたら兄貴とか皆に、あっち行け！　とかいわれて（笑）。すごい怖かったというか、驚いちゃった。
　あとね、その隣にいた一つ下の子と言い争いをしたのも覚えてる。まだ路面電車が走ってたころで、僕が、あれはチンチン電車だと言い張って、彼は、あれは都電というんだと。向こうのが大人なんですよ。僕は年は一個上なのに。それで言い争ったのは覚えてるの。
　何でそんなことを覚えてるのかというと、しばらくして、あれは都電というのが正しいというのがわかったので、多分恥ずかしいと思ったんですね。それでずっと覚えてるんだと思う。そこら辺ですかね、一番最初の記憶って。

――それは恥ずかしいという感情と結びついてるんですね、かなり。それにしても、色が最初の記憶なんですね、黒と赤の布団の。

村田　たまたまそうですね。あと、そのころ、二、三歳のころって後で写真を見るから、写真で見た記憶とごっちゃになってしまって、記憶のつもりだったのに、ほんとは写真で知ったものだったりもするので。ただ、そのころはまだモノクロ写真だから、布団の色は確かな記憶ですね。

――お兄様も覚えていらしたわけですね。

村田　兄貴も覚えてた。

――何人ご兄弟ですか？

村田　三つ上の兄で、二人兄弟。

――ご兄弟は仲が良かったのですか？

村田　いや、小さいころはけんかばっかりしてて、一日三回、顔合わすたびにけんかしてた。

――杉並に住んでいらしたのは何歳ぐらいまでですか。

村田　三〜四歳ぐらいまで。

――ということは、大体ご近所で遊んでるという感じでしたか？

村田　そうそう。狭いところで。井之頭公園とかに行ったのは覚えてるような、覚えてないような。
あとね、兄貴が小学校一年に入学したころまでいたので、小学校に一緒に行ったのは覚えてる。ついていったんですよ。授業中、机の下に隠れたような記憶があるんですよ。それは兄貴に確かめてみないとわかんないけど、何かそんな迷惑かけたことは覚えてる。

――好奇心の強いお子さんだった？

村田　まあ、普通かな。

――その当時、どんな遊びをしてらしたんですか。

村田　三歳か四歳のころに今度は世田谷に引っ越すんですけど、そこは社宅で、僕と同年代の子がたくさんいたので、そのときはいろんな遊びを。いわゆる戦争ごっこみたいのだとか、多摩川が近くだったので魚をとりにいったりとか、ほんとにいろいろ遊びましたね。

――幼稚園はどんなふうに過ごしていましたか？

村田　幼稚園は二子玉川幼稚園といって 20 年ぐらい前まであったんだけれど、もうなくなっちゃって、二子玉川の高層ビルがどんどん建ってるとこです。その入園式のときに覚えているのは、皆で記念撮影するときに、「ママどこ？　ママ、ママ」といって泣きながら後ろを振り返って、こっちに母はいたんですけど、一人だけそうやって後ろ向きで写ってる写真があって、それは恥ずかしいですよ。甘えん坊でしたね。

――やっぱり下のお子さんの感じなんでしょうけどね。お母さまのこと、ママって呼ばれていたのですね。お父さまは会社にお勤めで？

村田　ええ、普通のサラリーマン。

――お母さまはお家にずっといらっしゃったのですか。

村田　中学ぐらいになるまではずっと家で専業主婦ですね。

――何か記憶に残っているお母様のお料理とか？

村田　何だろう。肉が好きだったというか、まだ肉も高くてあんまり買えない時期だったんだけど、誕生日とかクリスマスのときには鶏の丸焼き、あれが好きで、兄貴と二人で取り合いですよ。ハイエナみたいなもんです。取り合って泣きわめいて、けんかしながら食べてたっていう。
　親父が同僚の結婚式の仲人をやって、その新婚夫婦が遊びにきたことがあるんです。そのときに鶏の丸焼きを出したら、その奥さまがキャー！　といって、大嫌いなんだって。特に丸ごと焼かれた鶏が出てきて、それで大変な騒ぎになって、丸ごと兄弟で食べられるっていうんで喜んだんだけど、そういう思い出とかね。

――当時、鶏の丸焼きをお家で食べるっていうと、やっぱり一定の料理の水準を感じますね。

村田　料理学校。何だっけな。江上トミ、そこに昔行ってたというのが自慢でしたね、おふくろは。

――気合いが入って、いろいろお料理してらしたんですね。

村田　そうそう。自分は料理がうまいんだって思い込んでたんだけど、そんなにうまかったかなって。

――- でも取り合っていたとのことですから（笑）きっとおいしかったのでしょうね。

小学生のころ

――小学校に入ってからは何か興味を持たれたこととか？

村田　小学校は漫画とか。漫画はもうちょっと後かな。でも、そのころは上野毛と二子玉川の中間辺りに住んでて、裏に山があって。山といっても雑木林みたいなのですが、とにかく自然で、まだカブトムシもたくさんとれたんですよ。ヘビとかトカゲとかもたくさんいて、そういうのが好きでしたね。好きというか、そういうのを採りにいったり、多摩川におたまじゃくしをとりに行ったり、そういう自然派ですね。社宅の皆で一緒に。何人ぐらいいたかな。七、八人、10 人ぐらいいたのかな、僕らと同年代が。その子たちと一緒に釣竿と……。

――野外で、しかもグループ活動ですね（笑）。グループになると序列が出てくることがありますが。どういう立ち位置だったんですか。

村田　僕は年齢が下のほうだったので、もう皆についていくだけ。

――お兄さんも一緒のグループにいたんですか。

村田　そう。兄貴は上のほうかな。でも兄貴もあんまりリーダー的な感じじゃなかったので、もうちょっと上がいたので、それがリーダーだったのね。僕は、もう完全についていくだけでしたね。

――小学校のころ、何かスポーツとか？例えば野球とか。

村田　してないですね。
ただ、でんぐり返しとかうまかった。器械体操になるんだけど。まあ、正式に器械体操を習ったことはないけど、中学高校のときは体操部のやつらよりもよっぽどうまかったですよ。バク転とか逆立ちとか、鉄棒の大車輪とかできた。丘の上にある社宅なんで、毎日、通学で階段を上り下りして、社宅自体も三階建ての一番上なので、当時、エレベーターとかないから毎日歩いて。

――自然にトレーニングになって。でも、そうだからといって大車輪ができるなんて。

村田　体が柔らかかったんですよね。親父もおふくろもスポーツはすごくできた人たちだったので。

――ご両親はスポーツを何かされていた？
村田　おふくろは、水泳。戦時中に神宮プールの大会に出てね、

３位になったという自慢話はよくしてました。最下位なんですけどね。水泳は小学校に入ってから、結構おふくろに厳しく教わりましたね。海は毎年、千葉の海岸に行ってました。それはすごく覚えてるな。多摩川では泳げないですからね。あのころ川は汚かったんです。　隅田川に親父とハゼ釣りか何かに行ったんだけど、ものすごく臭かった。まだ公害の意識もない時代でどんどんたれ流してたから、ものすごく臭くて真っ黒だったのを覚えてますね。今のがよっぽどきれいです。

――時代ですね、あのころはどこもそんな感じでしたね。

村田　そういえば三島（聞き手の出身地）に親父のほうの親戚がいて、もういないんですけど、二、三回行った覚えがあります。裏に川が流れていて、ものすごくきれいな川だったの、透明で。よくその川に身を乗り出して見てたんだけど落っこちたことがあって、水の中でフワフワって光がきらめいてるのは覚えてるんですよ。

――落ちた？光がきらめいている感じをその時に？

村田　何か助けられたみたいで。まだ泳げないころだったな。だれも見てなかったら、そのまま。

――そんなことがあったのですね！回虫の件にしても何か身体的に強烈な体験をされていますね。　当時は手を動かすというよりは体を動かすほうが多かったのですね。先ほど話されていた漫画は？

村田　描いてた。　絵も習ってたんですよ。小学校二、三年かな。小学校の四年になるときから大阪に行くんで、そこで完全に記憶が分かれてるんです。近所に多摩美があったから、多摩美の大学院生なのかな。タナカさんという人だった。最近、調べてみたんです。僕より 10 歳ぐらい上で多摩美を出たタナカさん。でもタナカなんかいくらでもいるから結局わかんなかったんだけど、そのタナカさんの家というかアトリエみたいなところで習っていて。でも、そんなに熱中もしなかったような気もするな。

――それはデッサンですか？　色を使って？

村田　色を使って。クレヨンとか水彩とか。

――景色を描いたり、生物を描いたり？

村田　そうそう。一度、多摩川に写生しにいこうって皆で行ったんだけど、もう遊びまくって結局絵は描かなかった。そのころは絵を描くより、そっちのほうが好きだなと。

――まだ体を動かすことの方が勝っていたのですね？そこから大阪に移られたんですね？

村田　四年になるときですね。最初は大阪の旭区というところ、ちょっと端っこのほうなんですけど、そこは一年もいなくて、その後は伊丹市。伊丹市には五年半ぐらいいたかな。中学が終わるまで伊丹にいて、また東京に戻ってくるんです。だから関西は六年間ぐらいですね。行ったのは 1964 年で、東京オリンピックが始まる前。戻ったのは 1970 年で大阪万博の年。東京オリンピックのときに東京を去って、大阪万博のときには東京に戻ってという、非常にわかりやすいというか、覚えやすいんですよ。国家事業と一緒に移動してるっていう感じですね。

――大阪に行って全く新しい環境で、割とすんなりとけこんだのか、それとも苦労したのかというと？

村田　割とすんなりとけ込みましたね。そんな環境の違うところは初めてだけど、あのころ、新幹線が通ってない時代に東京から大阪に行くというのは、今でいうと外国に行くような、そのぐらいのカルチャーショックがあったんですよ。言葉も違うし、何言ってるかよくわかんないし。でも、そのときに役に立ったのは漫画ですね。漫画描いて認められるっていうか、こいつは絵がうまいっていう。

――オリジナルで描いたのですか？　それともすでにある漫画、鉄人 28 号とか鉄腕アトムとか？

村田　ああそういうのとか、オリジナルもあった。

――で、うまいねっていう感じで？

村田　そうそう。

――ある意味手段だったですね、つながっていく。

村田　そういうふうになっちゃいましたね。大阪から伊丹に移ったときに、それをかなり自覚的にやったのは覚えてるんです。絵を描いてやろうって。東京から大阪に行ったときはどうだっけな。あんまり記憶にないんだけど。そうか、絵を描くっていうのは引っ越しというのがあったからなのかな。今考えると。

――ひとつのきっかけというか。

村田　大阪の旭区の学校で絵がうまいといわれてたんですよ。絵がうまい村田というふうになってて、それからですね、絵を意識し始めたのは。

――張り出されたりしてたんですか。

村田　四年以降は張り出されてるのは覚えてるんです。それ以前はどうだったかな。兄貴のが絵がうまかった。兄貴に比べたら僕はそんなにうまくなかったと思う。おふくろが絵が好きだったんですね。おじいちゃんが素人で絵を描いてたりして。おふくろは美術館とか博物館へよく連れてってくれて。上野の科学博物館、あそこは何度か連れてってくれて、その当時、小学校低学年だから美術館より博物館のほうがおもしろかったですね。

――恐竜とか？

村田　恐竜とかね。ただ、あそこはミイラとガイコツがあるので、ものすごく怖かったんです。宇宙から始まって、地球、植物、動物で、最後は人間になるから、そういう順番なので最後のほうは段々怖くなってきて、こうやって見ないようにしてた。かなり臆病ものでしたね。小心者で。

――そうなんですね。今の村田先生とはあまり結びつきませんが。（笑）
それにしても大阪に行って、そうやって皆に、絵のうまい村田と認められてという、その辺から絵に対する集中力が出てきたというか？

村田　そうですね、意識的にちゃんとやろうと思うようになった。けど、そのころが一番漫画を描いてたかな。漫画と絵画の区別はなかったですね。

――物語はつくらなかったんですか、起承転結みたいな。

村田　ストーリーも書いてたんですよ、思いつきで何枚もいくんですけど、兄貴におまえはストーリーが下手だっていわれたことがあるんです。それでかなり傷ついたんです、ストーリーの能力がないんだなと。

――それだけお兄さんのいうことを尊敬してたというか、素直に受けとめてたんですね。

村田　そうですね、そのころは。

――そういう感じで小学校高学年は絵に集中し始めていらした・・・。アウトドアも続いてたんですか。大阪ではあまり外では遊ばなかった？

村田　いや、遊んでました。大阪も社宅だったので遊んでたし、伊丹も結構外で。伊丹には亀がいて、水生動物が好きなんですけど、東京や大阪には亀はいなかったんですよ。多摩川にもいなかった。伊丹では用水路みたいなところにも亀がたくさんいて、よく取りにいってたな。試験の前日なんかでも取りにいったりして、よく怒られてた。

――亀ですか！取りにいって、育てるんですか？　キャッチ＆リリースですか？

村田　キャッチ＆リリースもあるけれども、小さいやつはもらっていく。
　同級生にひどいやつがいて、亀をつかまえて、甲羅を割って遊ぶという、そういうのを自慢してたやつがいて、それはもう悔しくてね、寝床の中で泣いてた。

――衝撃的だったんですね。時間が経ってから、寝床の中で泣く、って何か村田少年のこころを想像できますね。
そのときも何人かの人と一緒に行くことが多かったんですね。

村田　そうですね、一人じゃないですね、大体。

――野外活動は常にだれかとの関係性で動きながらですね。お兄さんの影響ですかね。
　中学になられてからも？

村田　中学は伊丹。小学校から中学校へあがるときぐらいかな、一緒の友だちと一緒にあがるというのは。

――クラブ活動とかが始まりますね？

村田　小学校五、六年からクラブ活動みたいな、ちょっと週に一回ぐらいのがあって、五年のときは書道部に入ってたんです。伊丹に移った四年生から、友達に書道教室へ行こうって誘われて、あんまり興味なかったんだけど行ってみた。それはそれでおもしろかったですね。六年になって美術部に入って、それはつまらなかったんですよ。小学生の美術クラブって、皆で大きな絵を描きましょうというやつで、それを一年かけてつくるんですけど、一部しか任されなくて、一部だけ描いててもつまんねえなと思ってて、ほかの下手なやつらと一緒だしイヤだなと思ってた。そういう生意気なところがありましたね。

――全体を一人で描くことを希望したということは、やっぱりそれだけの意識があったということですよね。ここだけ描いてればいいだと思う人だっていたと思います。自分一人で仕上げたいという意識があったということですよね。

村田　過剰な意識なんですよ（笑）。

中学・高校のころ

――では、中学はその流れで、美術部だったのですか？

村田　そう。美術部に入って、体操部にも入ろうと思ってたんだけども、なぜだか入らなかった。とにかく美術部。その中でナンバーワンになれるかどうかだったかな。体操部にはうまいやつがいたんです。美術部は大したのがいなかったから、おれが一番だなと思って。

――やってみて、やっぱりナンバーワンだったのですね。

村田　そうですね（笑）。

――いえいえ（笑）それはわかることですよね、子どもながらに。

村田　中学校のときが一番美術を意識してたかもしれないですね。写生大会というのが毎年一回あって、毎年三人ずつ金賞というのに選ばれるんだけど、三年間、すべて金賞を取ったんですよ。こんなことをまだ覚えてるっていうのが何かセコイというか……。でも一年、二年のときは二等で、一等は別の人だったんですけど、三年のときにはぶっち切りで一等賞、金賞をとって、それで結構満足したのを覚えてます。

――それはうれしいですよね。そのころは、はい上がる気持ちというか、だれよりも上に行きたい気持が強いことが多い時代だから。それをかなえてくれたということですものね、美術が。ということは、高校に入るときには、もう美術というのは意識してたんですか。

村田　そう。ここから美大の問題が出てくるんだけども、中学のときにもう美大とか芸大に進もうと決めてたんですよ。ただ中学が終わる年の春に東京に親父が転勤で引っ越さなきゃいけなくなって、それで高校入試をどうするかという問題が出てきた。東京都に住んでなかったから都立が受けられないんですよ。受ける資格がないんです。

――へえ、そうなんですか。ご家庭の事情でも？

村田　そうそう。それで私立の普通高校に行くか、あるいはデザイン科に行くかと迷ってしまって。ほんとは都立に行って、そのまま三年間勉強して美大と考えてたんだけど。当時、私立だと、すごくいい私立か悪い私立しかなくて、いい私立、公立、悪い私立みたいな順で、真ん中へんの私立はあんまりなくて、僕は大体真ん中へんよりちょっといいくらいだったから、上のほうの私立は無理なので、結局デザイン科を選んじゃったんですね。高校じゃなくて高等専門学校。五年制で短大卒の資格が得られるんです。育英高専に工業デザイン科というのがあったので、そこを受けて入ったんですが……。もうちょっとよく考えたほうがよかったなと。
　デザイン自体、自分がやりたいことと全然違ってて、まず入ったときに何をやらされたかというと、まっすぐ線を引く練習をするわけ。そんなことを習いに来たんじゃない。生意気にもアートをやりたいと思ってたわけですよ。なので、もう一年のときに、ここはやめようと思ったんです。高専は三年間を修了したら大学を受ける資格ができるんで、じゃ三年まで我慢して大学に行こうと。
　あと、その学校はかなり程度が低かったんですよ。
一年生のときに 50 人のクラスの 20 人ぐらいが停学とか退学になって。たばこ吸ったり、シンナー吸ったりとか、とんでもないやつがいて、半分近くですよ。そういうかなり荒れた学校だったので、こいつらと仲よくやっていくよりも自分で勉強しようと思った。高校のときが一番勉強したかもしれない。絵も含めて、普通の勉強も含めて。

――新しいところに行きたいという思いが強かったから勉強したということなんですね。それで三年で無事に？

大学では

村田　そう、三年で何とか。最初、第一志望が金沢美術工芸大だったんだけども、学校が内申書を準備するのが遅れてしまって間に合わなかったんですよ。大学受験する人ってほとんどいないから、皆五年まで行っちゃうので、そういうのに全然なれてなかったんですね。
　それで金沢は一番先に締め切られるので、受けられなかった。それが一番残念だったんだけど、一応、第二志望として東京造形大学。あとは芸大と武蔵美を受けて。芸大はもちろん落ちたけど、そのころ芸大ってあんまり魅力を感じなかった。

――いちおう受けておこうという感じだったのですね。

村田　そう。で、造形大に入ったのですが、何で造形大がよかったかというと、自然の中にあったから。山奥にあったということが魅力的で、それから学生数が少なかった。一学年 200 人ぐらいしかいなかった。多摩美とか武蔵美はやたら多くて、芸大に落ちたやつが行くすべりどめみたいな感じだったけど、造形大はそうじゃなくて割と少数精鋭だなって勘違いしたところがあって、それで。

――私もそう思います。ちょっと違いますよね。

村田　ちょっと違ってたんですよ。造形大いいなあと思って。

――そんなに古い学校じゃないですよね。何期生ぐらいだったんですか。

村田　八期生です。まだ１桁。

――まだ大学院がないぐらいの。

村田　全然なかった。

――絵ですか？

村田　絵画で。デザインは、もうイヤだと。

――その造形大は、家から通われたんですか。

村田　最初の一年間だけ家から通ってたんですが、１時間 40 分ぐらいかかってたので、２年目から立川に下宿して通ってましたね。

――ところで、お兄様はどういう方向にいらしたんですか。

村田　兄貴は昔、神童といわれてたぐらい勉強ができたんだけども、大阪に行ってからですね、狂ったのは。彼は小学校六年まで東京で、一応中学も決まってたんですよ、麹町中学という名門の。麹町―日比谷―東大という進学コースがあった時代です。越境入学なんだけど、うちの祖父母が昔、麹町に住んでたので、その関係で受けることができたんです。でも結局、中学は大阪の普通の公立に行って、それから勉強しなくなっちゃった。もうサッカーばっかりやってて、高校も入ったときはまだ上位にいたんだけど、どんどん下がってしまった。
　結局大学も一浪して法政大学の二部に。そこで映画研究会に入ろうとして間違えて演劇研究会に入ったんですね。それがまた僕ともつながってくるんですが、僕は大学に入ってから、その演劇研究会でやる公演のポスターを描かせてもらうようになったんですよ。何枚か描きました。

――造形に入ってから？

村田　入ってから。その公演を見て僕もやりたいなと思って、役者として出させてもらったりとかしました。
　美大に入ると、大体みんなそうだけども、絵を描かなくなっちゃうんですよ。安心というか、何のために絵を描くのか、モチベーションが下がっちゃって。とりあえず大学入るために絵を描いてたんだけど、入って自由に描けるとなると、描けなくなっちゃうんですね。

――ああ、何かわかる気がします。

村田　そのときに演劇に出会ってポスター描いたり、実際に肉体を使って表現するという、絵を描くよりもずっと表現が直接的だなと。それでしばらくというか、大学二、三年からずっと法政と造形と二つ通ってたという感じですね。
　絵は三年になるとき、二十歳のときに、もうやめようと思っちゃった。今考えてももったいないんだけども、その当時、18、19 歳のときに、原口統三という 19 歳で自殺しちゃう人の『二十歳のエチュード』という本を読んで。そのころ、よくそういう若くして自殺した人の本があったな、ほかにも『二十歳の原点』とか？

――高野悦子。たしかにいました。

村田　割と流行ってたんですよ。それで、すごくのめり込んでいって、表現するとは、生きるとは、みたいなことを考えてしまって、もう絵が描けなくなっちゃったんです。
　それに比べれば演劇のほうが手っ取り早いというか、直接的に生きることにつながってるなって思って、それで演劇に走っちゃったという。

――その演劇、舞台にも？

村田　うん。

――それはお兄様の演劇研究会の劇団に？

村田　そうそう。劇団立ち上げて、あちこちで公演してた。

――じゃ、19 歳ぐらいのときには、絵を描くことにあまり興味をもてなくなり、演劇三昧というか、演劇の日々であった？　大学はいらっしゃらなかったんですか。半分、半分？

村田　うん、半分、半分。

――いちおう単位は取るという感じで？

村田　そうそう。

――そうすると、普通に考えれば大学三年、四年、卒業して就職するのか、それともアーティストとして生きるのかということを考えるような時期に、演劇という別な方向にも興味が行って、ご自身としてどういう感じだったんですか、将来のことというのは。

村田　考えてなかったですね。美大生で将来のことを考えるやつはいないだろうと思ってたんだけども、実は皆、考えてたんですよね。僕だけなの、考えてなかったのは。皆、一生懸命、教職とか取ってて、僕だけバカやってたなって。
僕も最初、教職を取ってたんですよ。でも先生になるの嫌だなと思って。先生が嫌いだったし、自分が先生になるのは嫌だなって。だけど今はあっちこっちで教えてたりしている（笑）。

――そんなものですよね。

村田　それで教職も途中でやめて、おふくろにものすごく怒られましたね。そのころ兄貴は、演劇をやりに学校に行くだけで、昼間はずっとバイトしてたんで、親もいいかげん頭にきていたんです。そのころは自宅にいたのかな、あるとき僕がけんかして、一方的に殴られたんだな。ベロンベロンに酔っぱらって、全く覚えてないんだけど、走ってきたタクシーをとめて、その屋根に乗っかってバンバンバンとやったらしいんですよ。中から人が出てきたのを蹴っ飛ばしたりして、それで、そのタクシーは怖がって逃げちゃったんですよ。逃げてくれてよかったんだけどね。そしたら、一緒にいた仲間から、いいかげんにしろとめちゃくちゃ殴られて、それで血まみれになって家に帰ったことがあって、顔を合わせないようにするんだけども、ばれちゃって、おふくろに泣かれて、初めて泣かれちゃったんだけど、兄貴もああだし、おまえもそんなんじゃどうしようもない。せめておまえはちゃんと卒業して、どっか就職しろって。四年の秋か冬ぐらいで、ちょうどいわゆる就職のころだった。
それがあったから、ほんとに就職しないといけないなとまじめに考えるようになったんですね。

「ぴあ」での日々

――そうでしたか。それで『ぴあ』に就職されたんですか。

村田　そうそう。幾つか就職先を探して、もう一つ、サントリーを受けた。そのときは宣伝部がすごくいいので、まあデザインというかアートディレクションの仕事なんですけど。そこに演劇のポスターを持ちこんで、提出作品として関心もってもらったんだけど落とされて。
　で、『ぴあ』は受かったんです。『ぴあ』は当時、はみだし情報といって、脇のほうに一行だけコメントを載せるスペースがあったんですが、そこに「正社員募集。映画、演劇、音楽、美術各一名ずつ」という、たった一行の募集広告が出たんです。
　それも僕はあまり『ぴあ』は見てなかったんですけど、こんなのあるぞって友達が教えてくれて。じゃ、受けてみようかなと。映画、演劇、音楽、美術だから。そうそう、四年のときに卒業制作、僕は映画を撮ったんですよ。映画、演劇、美術は多少知識もあるし、職場としてはいいかなと。ただ編集とか全然やったことないけど。

――そうですよね。でも書くことは演劇のときに何か脚本を書かれたりとか？

村田　いや、脚本を書いたりしてなかったですけど、書くのは嫌いじゃなかったんで何かと書いたりはしてたけど。
　『ぴあ』が社員を募集したのは、そのときが初めてで、まだ社員が 10 人もいなかったんですよ、社員番号が１桁だったのを覚えてる。七、八人しかいなくて、編集部も小さい汚い一室しかなくて、そこでやってたんですけどね。

――多分そのころ読んでいました。あのころの『ぴあ』はキラキラしていて新時代到来のイメージでした。そうすると、入られてからは、エディターというか、ライターというお仕事が多かったんですか。

村田　まあ、エディターですね。一応、美術で採られて、美術ページの情報整理ですよね。どこで何をやってるかというデータ整理というか、それをずっとやることになった。
　ただ、そのころはまだアーティストになりたいなという意識はずっともってて、でも、どっかに就職しなきゃ生きていけないし、親も満足しないしというんで入ったんだけど、何かアーティストというか表現者というか、そういう憧れはずっと持ってて、一年目に個展を開いたんですよ。銀座の画廊を借りて。

――そうでしたか！絵ですか？

村田　写真。写真はそれまであんまり使ったことなかったんだけども、当時は割と写真を使う作品が多くなっていたころで、結構今考えると安易だけども、写真を使ってちょっとトリッキーな作品をつくって開いたんです。だけど予想以上に鳴かず飛ばずで。それで、やっぱり安易な気持ちでやってもだめだなと思って、しばらく封印しようと。
　そのころですね、個展を開く前だったかな。もう『ぴあ』を辞めようかなって親父に言ったら、最低三年やってみろと。三年やってだめだったら辞めてもいい。とにかく三年間続けろといわれて、初めて親父の言うことを聞いて三年間勤めたら、ほんとに三年目に仕事がおもしろくなってきたんです。
　理由は、ちゃんとあって、三年目に『ぴあ』が隔週刊になったんですよ。サイクルが短くなった。月刊だったのが二週間に一度になって忙しくなったんだけど、それと同時にニュースのページができて、それまではただ情報の整理だけだったのが、自分で書く欄ができたんですよ。書けるようになった。

――表現の場ができたということですよね。

村田　自分なりの紹介の仕方で展覧会について書けるという。
　それから、もう一つ大きいのは、僕と同世代のアーティストがデビューし始めたこと。二十五、六歳ですけど、そいつらを応援しようと思ったんです。というのが重なって、三年目になってすごく仕事がおもしろくなって、しばらくずっといようかなと思えるようになった。

――川俣さんの存在がすごく大きいと思うんですけど、川俣さんとは、どの時代に出会われたんですか。

村田　まさにそのころです。同世代のアーティストが出てきて、自分がアーティストになるよりも、こいつらを応援することで自分の表現欲求というのが解消されていくという、それは川俣と出会ってからですね。1980 年、川俣と同じ学年でも何人か出てきた。あの学年ってすごく優秀というか、いろんなアーティストが出てきてて、話を聞くとすごく共感するんですよ。ただ年齢が同じというだけじゃなくて、すごく考え方に共感するところがあった。川俣が出る前までは、戸谷成雄とか遠藤利克とかちょっと上の世代の人たちが一番一生懸命やってた時期で、彼らともいろいろ話ししたり、よく飲んだりしてたんだけども、どっか違うなと。まあ、話はおもしろいんだけど、ちょっと違うなと思ってた。そうしたら、川俣の同世代の人たちと一緒に話をしたりするようになると、本当によくわかるの。そうだ、それがやりたかったんだとかさ、ものすごく共感できた。同世代的な共感ってこういうことなんだなって初めてわかった。

――その『ぴあ』には何年ぐらいいらしたんですか。

村田　結局七年ちょっとです。

インディペンデントへ

――もちろん既にそれで生計を立てられていたわけだからプロとしてやっていらしたわけですけれど、その七年から独立されるときというのは、いよいよ自分はこれでやっていくんだという時なわけで、それは何が手掛かりがあったのですか？

村田　80 年ぐらいから仕事がおもしろくなって、どんどんのめり込んでいって、82 年にドクメンタ、ベネチア・ビエンナーレ、パリ・ビエンナーレという国際展が三つ重なったことがあって、そのとき初めて、こういう国際展を見たほうがいいなと思ったんですよ。
　というのは、ベネチア・ビエンナーレには川俣が、パリ・ビエンナーレには岡崎乾二郎とか保科豊巳とか僕の同世代が出て、あっ、これは見にいかなきゃいけないなと思ったんです。そのとき、一カ月間会社を休んだんですよ。よくあんなに休ませてくれたなと思います。
それで、イタリア、ドイツ、フランスを回ってる間にスイス、オランダなどもずっとめぐって、その間、ずっと美術館ばっかり見てたのね。ベネチア・ビエンナーレとかドクメンタという現代美術展もおもしろかったけど、それ以上にすごかったのは古典の美術で、最初に行ったのはローマだったんですね。飛行機代が一番安かったローマ経由で行って、そこからベネチアに向かったんだけど、ローマに二日間か三日間いて、すごいなと思ったのは、古代があるんじゃなくて、古代の上に街があること。何か物量が全く日本と違う。根本的に美術に対する考え方が違うなということを行く先々で感じて、それで帰ってきて、何か日本で美術をやってるのがばかばかしくなってきたというのが一つあるんです。
　あと、その年の暮れに、82 年ですけども、『ぴあ』編集部から新しく創刊された『カレンダー』という雑誌があって、そっちの編集部に移ったんですよ。初めて異動したんです。その巻頭をかざる記事と表紙のためにキース・ヘリングをフューチャーしようというんで、ニューヨークに飛ばされたというか、取材で行かせてくれたんですよ。ヨーロッパは一応見た。その二カ月後に今度はニューヨークを見せてもらって、十日間ぐらいいたんですけども、やっぱりすごかった。そこで美術に対する考え方が随分ぐらついた。
その翌年、『カレンダー』が全然売れなくて休刊になっちゃうんですね。僕の立場はそれで浮いてしまったんです。そのころには『ぴあ』はすごく売れるようになって、社員もどんどん増えてて 100 人か 200 人ぐらいいて。だから僕の立場は、会社としては難しい立場だったんでしょうね。いまさら『ぴあ』の美術担当には戻せない、みたいな。それでデスクというか副編集長みたいなことをやらされそうになって、それが辞める一番のきっかけだったんです。
　でもとりあえず引きとめてくれて、実はそれからまた一年いるんですけども。辞表を出す前に条件を出して、ほかの雑誌にも書いてもいいとか、英語を会社で学ばせることとか、これは飲まないだろうなという条件を幾つか提示したら、飲んでくれたんです。じゃ、いなきゃしようがなくなっちゃって（笑）、とりあえず一年間、何をやってたのかよくわかんないけど、ずっと一人のデスクにいたという。
その翌年になって、今度は組合ができることになったんです。もうこうなったら完全に企業。僕が入ったころは小さな編集室で、同好会か同人誌みたいなノリでやってたのが、完全に企業化してしまったので、もう僕のいる場所じゃないなと思って、それで辞めたというのが 84 年のことですね。

――１年間、ペンネームで文章を書かれたりした。それなりの報酬も得て、ある程度、これならば独り立ちできるという、そういう踏みがあったんですか。

村田　なかったです。全然考えてなかったんです。もうちょっと考えればよかったんだけども、どうにかなると思ってたんですよね。全然考えてなかった。

――でも、その一年間の間に英語も学ばれたし。

村田　全然うまくならない（笑）。何も身につかなかったな。むだな一年間だと思う。

――それにしても、会社の中の事情だけでは辞める決断には至らなかったということですね？その前に同世代が活躍するベネチア・ビエンナーレやニューヨークなど海外で広い世界を見たということが強く影響しているのでしょうね。

村田　そうですね。それから、ちょうど 30 歳目前だったので、ちょっと変えたいなというのはありましたけど、ほんとにその先のことというのは何も考えてなかったですね。何をやりたいということすら、なかったんですよ。アーティストになりたいとも思ってなかったし、編集をやりたいとも思ってないし、ライターでもないし、ほんとにどうにかなるというか、どうなるか楽しみだみたいな、そういう感じでしたね。

――そうですか、それまでにアーティストを始めとして多くの人との関係性を構築されていて、その時間や経験があったからでしょうね。そうでなかったら、辞めるという大きな決断にはなかなか至らなかったのでは？お話を伺っていると、小さい頃から色々な人との関係性をいい感じで保ち育てながら進んでいらしたように感じます。その後は、書くということが中心なんですか。どこかで教えられたりということがメインのお仕事になって？

村田　そうですね。

絵しかない

――何をしたいのか、どうすればいいかわからないというような 30 代前のご自分から、現在のステージまでに至る際の一番の転機というか、あれがあったから続いたとか、あれがあったからこの方向に来たというようなことは？

村田　一番大きいのは、おふくろが死んだことですね。その前もいろいろ何だかんだあったけど、辞めてからはそんなに大きな……。まあ、辞めてすぐにロンドンに行ってだらだらとして。

――そのときはご家庭は？お一人だったんですか。

村田　そう。ずっと一人。一人だから、そういう好き勝手なことができた。

――それは大きいですね。

村田　大きなきっかけは結婚していなかったことというのがあるかもしれない（笑）。何度か結婚するかなとか、しようかなと思ったことはあるんですけど、やっぱりやめとこうとなって、ずっとずるずると来て。
　あと、ずっとはしょって、親父が 2000 年に亡くなって、その三年後におふくろが亡くなりました。あっ、その間に兄貴の奥さんも亡くなったんです。僕と同い年なんですよ。45 歳で、まだ若い。おふくろの死と、兄貴のかあちゃんの死というのが大きかったな。
　兄貴のかあちゃんは司法書士の勉強をずっとしてて、その資格を得て、事務所を開いてすぐ亡くなったんですよ。仕事をする前にガンになっちゃって、事務所は開いたけど、そのまま。そのときに、これはいかんなと思ったのね。僕もいつ死ぬかなと。これは明日にでも死んじゃうかもしれないなと思って、それからまた二年後におふくろが亡くなって。それで、これは僕もあしたにでも死ぬかもしれないから、今のうちに好きなことをやっておきたいなと思って、そのとき僕は何がやりたかったんだろうと考えた。やっぱり絵なんだと思って、絵を描きたいというよりも僕には絵しかないんだと思って、それからですね、絵を描き始めたのは。

――すごい話。めぐりめぐって、やっぱりここに戻ってきたということですよね。

村田　戻ってきたというか、戻したのかもしれないね。無理やり戻したのかもしれない。

――それが 2003 年ですね。

村田　それで 2004 年に BankART が始まって、その翌年 2005 年に BankART のすぐ近くに共同アトリエというのができて、アーティストを募集したときに、真っ先に手を挙げたんです。
おふくろが亡くなったときは別に、何かしなきゃいけないという思いはあったんだけど、絵を描こうという感じではなかったと思う。BankART がプロデュースして共同アトリエをつくったとき、あっ、これは僕のためにつくってくれたんだと勝手に思って（笑）。

――そういう感覚わかります。このタイミングだったらそうでしょ、という感じ。

村田　そうそう。

――現在のお話になりますが、BankART の校長先生、それから評論を書かれアートジャーナリストとして多岐にわたる活動をされていますが、絵とそちらの仕事のバランスはどういう感じなんですか。

村田　時間的にいうと皆同じぐらいだと思います。絵を描く時間と、文章を書く時間、それからいろんな学校で教えたりする時間、それぞれ似たような時間配分かな。大体午前中に文章を書いて、午後に絵を描く。学校で教えるのは、その合間に入ってくるという形で。
でも一番稼ぎにならないのが絵を描くことで、教えたり書いたりしているのはすべて絵を描くためともいえますね。

――大学卒業のときには映画を製作されて、その後、写真も撮られてたけれども、やっぱり絵だという、その間って何十年も、ある意味ブランクがあっての、ですね。

村田　遅いですね、気づくのが（笑）。

――でも結局絵を描くためには、その何十年という時間が必要だったという？

村田　そうかもね。

――今はどういう絵を描かれてらっしゃるんですか。

村田　絵を描きたいと思ったんだけど、じゃ、何描けばいいんだっていうと、別に何もないんですよ。

――「何もない」というのがキーワードですね。

村田　絵を描きたいという思いばっかり先走ってて、とりあえず前から関心のあったフェルメールの画中画から描き始めたんです。フェルメールが絵の中に描いてる絵、絵の中の絵で、そればっかり描き始めて、そこから絵の部分を拡大したりとか、大きな絵を極端に縮小して描いたりとか、自分のオリジナルというよりも既にある絵を描いてる。
もうオリジナルの絵は、これだけたくさん絵があるんだから自分で描かなくてもいいかなという気もするんで。自分が描くよりもずっといい絵はたくさんあるから、それをもう一回描いてみようかなっていう。

――以前村田先生が講義の中で、自分が尊敬するアーティストというのは、自分が描けない絵を描く人だと仰っていたのですが、そのことを時々思い出します。とてもシンプルで強い基準だなと思って。

村田　そうそう。どういう文脈で言ったんだっけな。

――それは美術を生み出す力という視点からの話で、自分にはできない発想だったり、技術や忍耐力を持つ人を尊敬すると話された覚えがあります。そのとき川俣さんの話もされたと思います。

村田　そう、かなわない。自分はかなわないなと思う人には、やっぱり敬意を払いますね。ひれ伏してもいいかなと（笑）。

――中学のころは美術で一番になるというような気持ちをすごく強くもっていらしたのですね。そこから表現ということに順位があるわけではないということを感じ取られた時期がありますか。ご自分の見方と表現方法をもてば、それが一つの世界であって、金銀ではないなどというような？それとも今でもやはり金賞を意識されますか？

村田　どっちもありますね。もちろん芸術には一番も二番もないというのは基本的にあるんだけど、でも、ないとはいえ、あるんですよ。

――そうなのですね。その辺りはまた改めてじっくり伺いたいところです。今後のことについて、これからなさりたいことはありますか？

村田　あるかなぁ。

――（伴走していらした）川俣さんは世界的な美術家として活動されていますが、今後、アーティストとの伴走を続けていくというイメージなのか、それとも、ご自身の絵の世界を追求していきたいのか。

村田　どっちかというと後者のほうですね。絵を描きたいというのしかないのかなと。例えば壁画を描きたいとか、グラフティを描きたいとか、そういうのはありますけども、ほかには……。

――それが最大のというか、十分なことで。お子さんがいらっしゃいますよね。

村田　うん、二人いますが、上は、とりあえずデザイン科に行ったんですよ。絵はあんまり描かないけど、好きみたいですね。下も今、中学校だけど美術部。

――やはりお父様の影響？

村田　マジック同好会と美術部というのに入ってて、どっちかというとマジックですね、好きみたい。アートを理解する能力というか、感性というか、そういうのをもってもらえばいいとは思いますけど、それ以上、別になってほしいとは思わないですね。母ちゃんも一応、美大出ですが。

――そうでしたか、お子さんからすれば、そういう環境だし・・・

村田　嫌がってますけどね。上の子なんかは、中学校のころ美術館に連れてったら嫌がって、嫌がって。小さいころから連れてってるから。

――でも結果的にお二人とも美術に興味を持たれていますね。最後になりますが、今までで仕事の面で大きな影響を受けた人はいますか？

村田　あんまりこれといっていないような気もするんだけれども。まあ、兄貴は、いつもずっと前にいるからね。前というか先というか常に三年先にいるので、それはすごく影響は大きいですよね。
あとは川俣と、もう一人、『びあ』の最初のころに出会った人で、浜田剛爾さん。もう亡くなっちゃったんだけど、パフォーマンス・アーティストで、パフォーマンスを日本に持ち込んだ人なんですよ。よく家に遊びにいって、いろんなことを教えてくれたんで。

――そうですか、もっともっとお話を伺いたいところですが、それはまた次の機会にということで。貴重なお話が伺えました。ありがとうございました（録音終了）

≪聞き手：田村燿子（GALLERY エクリュの森
於：GALLERY エクリュの森東京オフィス
録音日：2018 年 1 月 17 日 ≫

本紙は、ギャラリーオープン以来不定期に発行しているエクリュの森便りの特別編となります。特別編の初回は現代美術家であり美術ジャーナリストの村田真さんへのインタビュー を掲載、どんな子供時代を送って現在に辿り着かれたのかについてお話を伺いました。（村田真さんとは、村田さんのアートライティングの講義を聞き手である当ギャラリーディレクターが生徒として受講したことからご縁が始まりました。この場を借りて今回のご厚意に感謝申し上げます。）

｜Interview’ roots’ とは｜
作家・作品のルーツ（起源）に興味を持つ当ギャラリーディレクター田村燿子が行なっているインタビューのシリーズ。
印刷物は今回が初めてとなります。

今後の GALLERY エクリュの森の予定

6 月　岩間弘展（彫刻 -GALLERY エクリュの森）／　明田一久彫刻展（目黒長泉院附属現代彫刻美術館・作家協力）
　　piece of peace 展Ⅳ（グループ展 - 三嶋大社宝物館ギャラリー）
7 月　李元淑展（木版画 -GALLERY エクリュの森）
8 月　岩田俊彦展（漆 - GALLERY エクリュの森）
9 月　横井山泰展　同時開催（油彩 -GALLERY エクリュの森 & 同時開催さんしんギャラリー善）
10 月　吉川和江展（絵画 -GALLERY エクリュの森）
11 月　大平實展（彫刻 -GALLERY エクリュの森）　／杉山功（彫刻 - 静岡市美術館・作家協力）
12 月　okuru 展（プループ展 - GALLERY エクリュの森）

6 月 岩間弘

7 月 李元淑

8 月 岩田俊彦

9 月 横井山泰

10 月 吉川和江

11 月 大平實

編集・発行　GALLERY エクリュの森

｜本社・ギャラリー　Head Office・Gallery｜
〒411-0035 静岡県三島市大宮町 2-16-21 伸和ビル 1F　TEL＆FAX 055-976-2320　OPEN 11:00–18:00 日・月 休
URL www.ecru-no-mori.jp E-mail info@ecru-no-mori.jp
1F-2-16-21 Omiya-cho, Mishima-city,Shizuoka　411-0035 Japan　(OPEN:11:00–18:00, Closed on Mon and Sun)
｜東京オフィス・KINMOKUSEI　Tokyo Office, Viewing room｜
予約制　Resevation is required　E-mail info@ecru-no-mori.jp
〒106-0031 東京都港区西麻布 3-2-16-405　3-2-16-#405, Nishiazabu, Minato-ku, Tokyo　106-0031 Japan